

サポート

No. 190

令和5年2月3日発行

県教育庁特別支援教育課指導班

第20回秋田県特別支援学校文化祭

第1回 わくわく Show time

令和4年12月2日（金）に「第1回わくわく Show time」を開催しました。これは、今年度から新たに始めた全県の特別支援学校をオンラインでつないだ発表会で、天王みどり学園の生徒がにぎわい交流館AUのスタジオから進行を務めました。秋田県高等学校文化連盟の御協力を得て、秋田県立秋田南高等学校吹奏楽部の皆さんによるファンファーレ「ワンダフル・ヒルズ」の華々しい演奏で発表会が始まりました。発表は、能代支援学校のミュージカル「桃太郎、発つ!」、ゆり支援学校の和太鼓「和」と演舞「いやさか秋田」、大曲支援学校の「曲耀太鼓～跳～30周年 Ver」、稲川支援学校の「西馬音内盆踊りと湯沢南家佐竹太鼓」、比内支援学校の「よさこい・絆 舞桜」でした。全て録画による発表でしたが、撮影や編集を工夫したことで、地域の特色を生かした日々の表現活動の取組が、十分に伝わる発表になりました。リアルタイムでのライブ感も大切にしたいと考えたことから、発表校以外の参観校はライブで感想を発表しました。そして、交流活動「ダンス『ツバメ』」では、スタジオの天王みどり学園生徒と各校が、楽曲に合わせたダンスや合奏などの自由な表現をリレー中継しました。一校当たりの持ち時間は短いものでしたが、各校の皆さんが笑顔で取り組んでいる姿からは、「一体感」「ライブ感」そして「楽しさ」が伝わってきました。リアルタイムで参加できなかった児童生徒も、後日オンデマンド配信で鑑賞し、「参観できてよかった」などの意見が聞かれました。

今回は、県内の特別支援学校限定配信の発表会でした。リアルタイムでのZoomの接続総数は75端末、オンデマンド配信の視聴回数は237回、再生時間は12.4時間でした。今後、参観対象や啓発の仕方など、検討していかなければならないことがあります。来年度もオンラインのよさを更に生かした発表会を企画し、県内特別支援学校等における芸術文化活動の充実に向けて、取り組んでいきたいと考えています。御協力ありがとうございました。

（支援学校天王みどり学園 教諭 飯澤 朋子）



にぎわい交流館 AU での進行の様子



交流活動ダンス「ツバメ」のリレー中継

令和4年度 e-AKITA ICT学び推進プラン事業 ICT活用推進モデル校の取組について

e-AKITA ICT学び推進プラン事業では、ICT活用推進モデル校2校を中心に、全ての県立特別支援学校において、ICTを活用した教育の推進に取り組んできました。

今号では、ICT活用推進モデル校2校の今年度の取組を紹介します。特別支援教育課では、モデル校による実践の成果に基づき、ICTの効果的な活用による教育の充実に引き続き取り組んでいきます。

県立聴覚支援学校

今年度は昨年度の実践を踏まえ、特別支援教育におけるICT活用の視点と、情報活用能力の育成の観点をICT活用計画に位置付け、目的を明確にしたICT活用の実践に取り組みました。具体的には、①情報活用能力実態チェックリストを活用し、児童生徒の実態把握と指導に生かしたこと、②ICT活用実践記録シートを作成し、「特別支援教育におけるICT活用の視点1・2」に基づいて活用の目的や活用の場面を明確にした授業実践を行ったこと、③ICT活用推進委員会をはじめとした分掌部の役割分担や、各学部等を中心とした取組を組織的に進めたことで、幼児児童生徒の年齢や発達段階に応じて、「育てたい力」や育成を目指す資質・能力を育むために有効なICT活用の実践を数多く蓄積することができました。



モニターでの授業参観の様子



ロイノートを使った
協議内容の共有

その成果については、12月6日のICT公開研究会で報告したところです。当日は、ハイブリッド方式で開催し、東北地区の聾学校・聴覚支援学校や秋田市内の小学校からも参加いただきました。授業研究会では、個別の教科学習であってもICTを有効に活用することで、他者の意見から学んだり、自己の考えを深めたりすることが可能であることを確認できました。この2年間の取組の成果を次年度につなげ、次なる課題へ学校全体として取り組んでいきます。

(聴覚支援学校 教諭 泉 拓行)

県立横手支援学校

今年度、本校は文部科学省の特別支援教育におけるICT活用の視点1・2を基にした「教科等の指導の効果を高める」「情報活用能力を高める」「障害による困難さの改善・克服を目指す」の3つの視点で、活用の意図を明確にしたICT活用の推進に取り組みました。

「写真や動画等で視覚的な提示をし、理解を深める」、「覚える内容を減らして安心して学習に取り組めるようにする」、「書字の負担を軽減する」などの様々な意図で数多くの授業実践が行われました。昨年度からの2年間の実践については「ICT活用事例集」に集約し、本校ホームページにて公開しています。ぜひ御覧ください。



オンラインによる
公開研究会の様子

12月14日に実施した公開研究会は、新型コロナウイルス感染症感染拡大予防のため、事前録画配信による授業提示とZoomを用いたWeb会議の形式で開催しました。



提示授業 小学部4年
生活単元学習の様子

当日は県内特別支援学校からの20名の参加者と本校職員が、小学部、中学部、高等部の3つの分科会に分かれ、提示授業や参加者から紹介があったICT活用事例について、活発な協議を行いました。

今後は、これまでの取組の成果と課題を基に、より効果的なICTの活用に向けて取り組んでいきたいと考えています。

(横手支援学校 教諭 大川 浩平)

本校ホームページアドレス <http://www.yokote-s.akita-pref.ed.jp>

インクルーシブの風

このコーナーでは、インクルーシブ教育システムの推進の観点から、各校種等における特別支援教育に関する取組や交流及び共同学習の様子などを紹介していきます。

今年度から、小・中学校等における特別支援教育に係る研修を「通常の学級」、「通級による指導」、「特別支援学級」の学びの場ごとに設定し、ニーズに対応した研修ができるよう変更しました。

「通常の学級実践研修」は、障害のある児童生徒が在籍している通常の学級の担任の実践的指導力の向上を目的とした研修です。今年度は全県で55校57回の実施がありました。このうち、大館市立山瀬小学校の実践を紹介します。

小・中学校における特別支援教育の充実に向けて 通常の学級実践研修～大館市立山瀬小学校の実践から～

大館市立山瀬小学校の算数科の提示授業では、学習上の困難さがある児童が、見通しをもって活動に取り組む様子が多く見られた授業でした。個別の指導計画に記されている目標を達成するための「個別の配慮（手立て）」が効果的であったことの表れだと考えています。

学習課題を自力解決する場面でのことです。特別支援教育支援員による支援の対象児童の一人が、どう取り組んだらよいか、じっと考え込んでいました。場面の状況から、近くにいる支援員が解決に向かうためのヒントをすぐに伝えるかと思いましたが、支援員と対象児童のとった行動は想像とは違うものでした。対象児童は机の脇に下げているヒントカードを手に取り、それをよりどころに自分の力でやり遂げようと活動に取り組み始めました。算数科における対象児童のつまづきを想定した手立てが準備されていること、授業者と支援員がその「個別の配慮（手立て）」を共有して対応し、対象児童の自力解決につなげていたことが素晴らしいと思いました。

対象児童一人一人の個別の指導計画には「自分に合った方法を見つけて、自分の力で解ける問題を増やす」「自分の得意な方法で理解しようとする」といった目標が記されていました。その目標と関連付けながら実現可能で具体的な「個別の配慮（手立て）」を検討し、授業で実践することにより、主体的に自力解決しようとする対象児童の姿につなげており、「小学校学習指導要領解説 算数編」に示されている「一人一人の教育的ニーズに応じたきめ細かな指導や支援」の好実践例であると感じました。

また、ユニバーサルデザインの視点による「指導の工夫」が、豊富な授業であると思いました。本授業では、焦点化された学習課題の提示や発問（焦点化）、理解を促すための視覚情報（視覚化）、自己の考えを広げ深める学び合い（共有化）などが見られ、それらの「指導の工夫」が、学級の児童全員の主体的・意欲的に取り組む姿につながっていました。

日々の授業実践の積み重ねが、授業に向かう児童の姿勢につながっており、参考にしたい実践事例です。

（北教育事務所 指導主事 加藤 宏和）



解いた問題を友達と確認している様子

「希望の像」秋田きらり支援学校へ

現在、栗田支援学校第2校舎前庭にある「希望の像」は、昭和43年10月、新屋地区に住んでいた高島善治氏が家庭を離れて秋田県立養護学校の寄宿舎で生活していた子どもたちに、夢と希望を抱かせようと私費を投じて寄贈してくださったものです。

今後、栗田支援学校の改築工事の際、像が撤去されるため、この度「希望の像」のレプリカ及び写真パネルが制作され、令和5年1月13日（金）に、秋田きらり支援学校で行われた秋田県立養護学校の創立から60年を記念する行事で披露されました。

今後、地域とのつながりの象徴である「希望の像」のレプリカは、秋田きらり支援学校で展示され、子どもたちを見守り続けます。



希望の像と写真パネルのお披露目